

北京騷擾

その七

中島八十一

かくして再び新しき朝迎えへたり。今や習慣となりたる行動様式に従ひ、我が家となりたる部屋を出で朝餉に向ふ。九時近きの遅き出發なれば席も空きたらんと思ひきや食堂の前に人群れ立ちてかまひす喧し。見知りたる顔の聲掛け來る。食事作り得ずとの由。別の者聲くぐもらせ明日にはガソリン手に入るは難からむ、と後に續けたり。學會グループの輩一群をなし、その中よりリーダー格現れたり。ホテル離れて北京空港に向ふべし。各人チェックアウトし三十分後にここに再集合と訓示しをり。

余は下々なれば言はるるまま行動する他なし。直ちに自室に取つて返し荷物をまとめフロントを訪ひたり。フロントは靜穩にて如何なる不都合もなし。テレビの言ふ通りなり。チェックアウトの手續圓滑に進みをり。クレジットカードの使用可能なり。敢へて内容を確認することも無し。サインしてクレジットカードを受け取り、手続きはいとも簡單に終了せり。この際の支拂ひ傳票の手元に残り居り。ゆゆしき誤りに後日氣付くことになれり。ホテル従業員の心中は實のところ平穩なかりしや。

集合場所と決められし食堂前にスーツケース轉がして行けばすでに主だちたるメンバーは皆終結し居り。余の留學先のボス夫妻には歐洲より彼ら二人のために救援機を飛ばすらんと傳ふる者あり。余らには救援機飛來の有無定かならず。そも日本に向ふ飛行機の便ありやなしや皆目不明。リーダー曰く、とにかく空港に赴き、飛行機の來るまで二日にも三日にても寢泊りする算段整へたし、と。この日は學會仲間にて持たれる宴會の豫定あり。誰ともなく會場を覗きに徒黨をなし押しかくれば、大型のトレイに高級料理が限りなく並べられ、ラップ掛けられたる。これも北京は平穩というテレビ傳ふる通りのしつらへなり。ラップに包み得る料理はラップを外してそれに包み込みまた持てる袋物に詰めた。空港にて寢泊りせむには食事よりも水と誰しも思ふ。賣店のありか把握せる者あり、一同賣店に向ふも店員見當たらず。一同カウンター越え、中に入り込む。〜リットルの大型ペットボトル入り水を各人二本づつ抱へて元の場所に戻りたり。代金拂ふ法無し。北京市當局は、日本人とはかくも作法心得ざる民族なりと思ふらん。

ホテルの前にマイクロバス著けり。世の中には器用なる御仁あるものなり。如何にして調達したらんと訊きたるに金なりと短く答へり。外より見らるるを恐れ持てる限りのスー

ツケースを窓に立て掛けたる所、運轉席の先を除けば余らの視界も遮られき。幾日か以前に來たる道を空港に向けて走りたらんも視界明瞭ならざればいづくを走りたるか見當もつかず。バスは快調に飛ばしをり。またもや余の心中に好奇心むくむくと頭をもたぐ。スーツケースを五センチばかり横にずらし道路脇を見たり。重機關銃の銃口を道の中央に向けて定間隔にてずらりと並びたり。その中の一基と通りすがりに目合ひき。否、相手は口なく。鈍重なる余にはあるものの、この時ばかりは観念せり。ハチの巢になりしバスの容易に想像せられたり。この時より時間はゆっくり流ること著し。空港までの道のり長ければ、いづくにてか發砲あるべし。スーツケースを元の位置に戻し、視界を閉ざしたり。

口を利く者絶えて無し。他にも銃口を見たる者あるらん。道路脇に展開したる軍隊の瀟陽より進軍し、その目的は首都防衛なりと知るは幾月も後のことなり。いと長く思はれし時間の後にバスは北京空港にひっそりと滑り込みたり。自らの荷物を抱へ中に入ればかくも廣き場所を隅々に至るまで日本人埋め盡くしをり。ここにて寢泊りせんとせば持ち來たる水の量より二日が限度と計算す。北京在住と思しき小學生の數十人、いづれもランドセルを背負ひて並びたる光景胸の痛みたり。

一日の丸飛行機の飛來の有無分からざりしものの、とにかく行列を作りて待つことにせり。晝餉の前にホテルを出づれど、特段空腹感無し。空港にても銃口の光る幻影去らざりき。遠くの行列にボス夫妻の姿見つけたり。荷物を他人に頼みて近寄り、聲掛く。スイスエアによりて逃ぐといふ。奥方余に向ひて君ただちにここを離れるべしといふ。余はこの奥方の英語にて話を初めて聞きたり。余が持ちたるはC航空の航空券なるものの、歐州ならむと亞米利加ならむと國外に出づるを得ればいづれの航空路線にても乗り込むらん乗り込まむと思ひ定めし。片や、向後中國を訪るるには米國籍の飛行機に限るとも思ひき。げにその後の三度の訪中はいづれも米國の定期航空路を用ゐき。日本國の救援機を用意したるは幾年も後の灣岸戦争の際なり。

(令和五年九月一日受附)

その八

中島八十一

廣き空港のロビーには恐らく飛行機五乃至六機分程の人居りたらん。新しき動靜傳はる氣配なく、さりとして危険なる出來事も起らず、時間のみ刻々と過ぎ去りし。立つことに倦みて、いつしか床に座り込みたり。夕餉の時刻になりたればホテルより掠奪したる食物をいくらか口にし、水を飲む。

廣間はこはいかにと訝らるるほどに靜謐なる待合室と化し、外に出づること憚らるれば時計にて日暮れ過ぎたるを知るのみ。夜も八時を過ぎるころになりてやうやう日本人グラインドスタッフ現れ、ハンドマイクを通じて一同に聲掛くるに、すでに日本からの臨時便飛び立ち當地に向かひつつあり、豫約チケット持ちたる方々は檢札仕らむ、との由。歡聲上がることなく、靜謐のまま變りなし。疲れたりやあるいは緊張することにも疲れたりや。

これより約三時間。夜九時近くに〇航空の機内に脚を運べり。窗際にはあらざれどわずかに見ゆる空港には〇航空の機體あり、いくらかの外國の航空機ありたり。余のボスもスイスエアーに乗りたらん。ボンボワイヤージュ。

乗客とCAの交情薄き飛行なりけり。湯茶のサービス無し。搭乗の謝辭も無し。緊急時の脱出方法の解説せられたるや記憶に留まらず。おほかた東京より北京に飛來するに空の運航なるべし。満席の歸路にても搭乗率五十%なるは已んぬる哉。飲み物なきも致し方なし。水を空港に捨てたることつくづく後悔せり。CAに笑顔なきこと、過剰なるサービスのなきことにかつて東京よりパリに至るまでアエロフロートにて飛びたることを思ひ起せし。漆黒の暗闇の中、揺れもなく飛び續くる余の乗機に日の丸付けたる直掩機の出迎へ期待せざるも、早く中國領内を抜けることをのみ祈り續けり。林彪の脱出をちらと思ひ起せり。

北京時間にて日付變る頃、突然機内にアナウンスあり、日本領空に入りたれば機内の電話器にて電話すること可能なり、と。早速假住まい中の自宅に無事なる一報入れ、實家等各所にその旨取り繼ぐべしと傳ふ。

日本時間午前〇時に羽田空港に著陸。寡黙なる集團の一人として飛行機を降り立つ。他のエアラインの乗客も同時刻に到着しつれば空港は北京より飛來したる人々に溢れ混雑しをり。出迎への人數多くなけれど、すべて報道陣なればにぎにぎし。女、子供目掛けて殺到し、「大變ならん」と勞ひの言葉を掛くることよりインタビュー始まる。その中の一人余に聲掛けたり。「D新聞なり、君寫眞持ちたるや」。余「無し」。若し持ちたれば如何せんと訊きたれば良かりしものを。

タクシーにて假住まいのマンションに歸る。子供たちは深き眠りにつきたれば、家内のみの出迎へとなれり。テーブルの上に並べし、北京より持ち歸りたる食べかけの料理の何とも寒々し。

翌日より余の日常生活再び始まり、騒亂のこと急速に遠き世界のこととなれり。徒勞に終はりし北京訪問の間余は如何なる出來事の中にありやと〇新聞を北京に滞在せる日數分だけページを繰りたり。驚くべし。写真はすべてAP通信社の配信に頼り、記事はすべて

北京支局内にて書かれたものなり。日本の報道機関に勤むる者の記者魂いづくにかありなむ。

叔父より無事を喜びつつ、自らの判断に誤りあり、権力闘争なること見抜かざるは情けなしと電話入りたり。

月末になり次男生まれたり。その頃銀行よりクレジットカードの使用明細届きたり。北京のホテル内の掛かりは美ドル建てにて計算せらるるはずのところ、人民元にて計算せられたり。當時 USD は約百二十圓、RMB は約四十圓にて交換せられたり、およそ三分の一の支拂ひで済みたり。ホテルスタッフの不慣れのためなるや騷擾もたらせる心の動搖のためなりや今なほ不明なり。(完)

(令和五年九月十八日受附)